

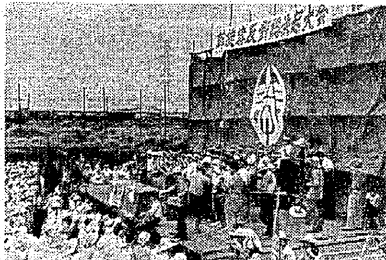
特集・20年のたたかい……①

■このスライドは、昨年の11月9日、三池大災害20周年裁判提訴10周年の抗議集会で上映したものを紙上編集したものです。

「生命を守る」たたかいの発展と裁判闘争の勝利のために

ひたすら全面降伏のみを迫った。三池の労働者はたたかざるを得なかった。

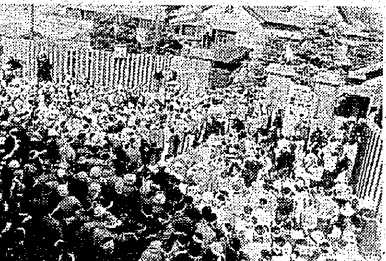
そして安保体制下の全産業的な合理化の進行を前に、全国の労働者の関心はいっそう強まりそれが三池を励まし、たたかいの勝利を確信させることになった。



15 成立早々の池田内閣は「流血の惨事を避ける」というふれこみで三池闘争の收拾に乗り出し、8月10日中労委のあっせん案を示した。三池は大会を開き「拒否以外になし、たたかう体制十分、共にたたかおう」と激をとばしたが、炭労臨時大会は激論の末あっせん案受諾を決定した。



16 あっせん案はまったくの『ペテン』だった。「このままで三池のたたかいは終るならなだれ式に炭鉱の合理化はすすみ、すべての産業に首切り合理化の風がくる」とわれわれは訴えた。しかし敗北感はなかった。「たたかいは今から」「たたかいはここから」と、スト解除、就労総決起集会を開き、今後のたたかいを誓い合った。

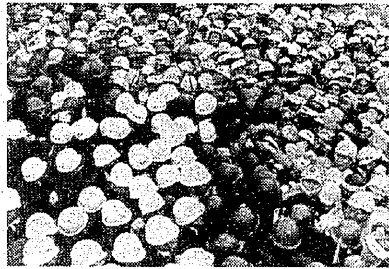


17 そして、いよいよ就労。日本中を揺るがした313日のたたかいは終わった。

第2組合は会社との間に『平和協定』を結び、会社は職場活動家を排除したあと、職場での徹底した差別取り扱いと三池労組の切り崩しに狂奔するとともに、第2次合理化案を全面的に強化した第3次合理化を強行した。

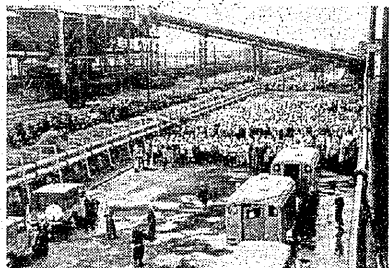


三川鉱の坑道は巨大な煙突さながらのありさまとなつた。



18 この悲報は三池のすべての労働者をふるい立たせるとともに、三井資本の野蛮な攻撃を余すところなくさらけ出し、世論は三池のたたかいを支援し、会社を糾弾した。このために、変って動員されたのが延べ10万人に及ぶ武装警官だった。

それ以降、第2組合員の強行就労、不当逮捕、ホッパーでのたたかいいたるまで国家権力による弾圧とのたたかいは激しくなっていたのである。

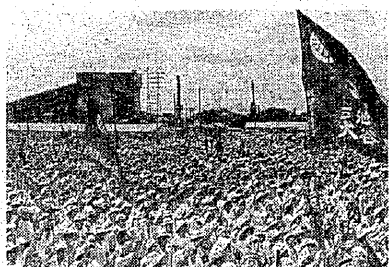


19 長期化したたたかいは、しだいにホッパーに集中していった。第2組合員が就労し出炭してもホッパーさえ押さえておけば石炭を搬出することは不可能だった。

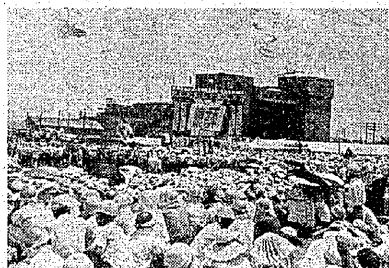
ホッパーを守れが合言葉となり、全国の仲間が三池にかけたのも、この時期からである。



20 安保に反対するたたかいは、三池を守れという全国の労働者のたたかいとなり、三池でも岸内閣打倒、アイゼンハワーの来日阻止、批准阻止などに向けて積極的にたたかった。



21 7月17日、全国からの労働者を迎えて「安保体制粉碎・不当弾圧反対・三池を守る総評九州拠点大会」が開かれ10万人がホッパーを包んだ。

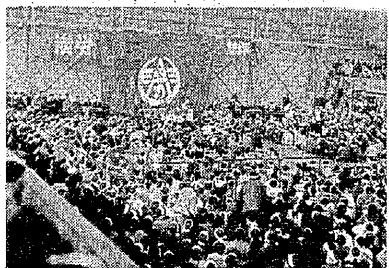


22 日経連の前田専務理事は「炭鉱合理化は日本資本主義の全体制にかかわる問題だ」といった。その頂点に三池はあった。資本はいかなる妥協もせず、ただ

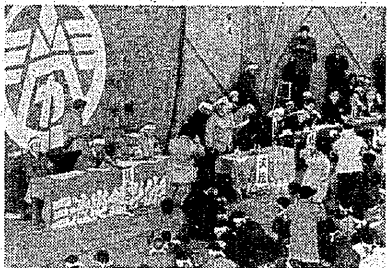


23 一方、会社にとってはエネルギー転換の政策のもとで、反労働者的、非人間的な合理化を遂行するためには、三池労組の団結、そしてその中心となる職場活動家の存在は最大の障害であった。

それだけに強硬な方針でのぞみ、1月25日ロックアウトを宣言、三池労組は完全撤回を目指して全面ストライキに突入した。「安保と三池」のたたかいはこの幕はこうして開いたのである。



24 たたかいは前進した。しかし、組合員と主婦会、家族ぐるみで団結を固め、苦しい生活を支えながら、しだいに会社を追い詰めているとき、会社や右翼的労働組合のテコ入れによって批判勢力なるものが生まれ、戦術路線の変更を求める菊川武光らは中央委員会の開催を要求。

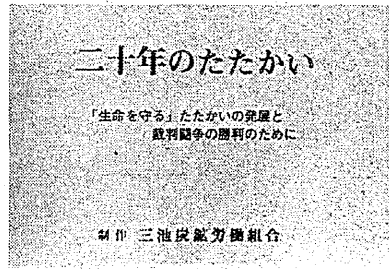


25 3月15日、この要求が通らないと見るや退場し、刷新同盟を名乗り、2日後には第2組合を結成した。この分裂は会社側を利するとともに、その後のたたかいを長期かつ困難なものにしたのである。



26 三池のたたかいは権力と資本は金を湯水のように注ぎ込むとともに、すべてのものを動員して弾圧してきた。

3月29日、四山鉱正門前で整然とピケについていた組合員に、会社に雇われた近郊の暴力団の一隊が武器を手に襲いかかり、ピケ隊の一員であった久保清さんの心臓をアイクチで突き殺害した。



1 タイトル
二千年前の今日、三井資本の手でひき起こされた三川鉱大災害によって、四百五十八人の命を奪われ、八百三十九人のCO患者を出した。
二度とこのような災害と苦しみを繰り返さないために「生命を守る」たたかいをいっそう強め、裁判闘争勝利に向けて前進する決意をこめて、この一編をおくります。

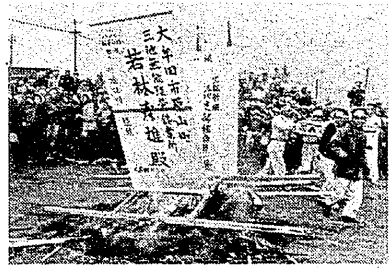
2 20年前の今日、三井資本の手でひき起こされた三川鉱大災害によって、458人の命を奪われ、839人のCO患者を出した。二度とこのような災害と苦しみを繰り返さないために「生命を守る」たたかいをいっそう強め、裁判闘争勝利に向けて前進する決意をこめて、この一編をおくります。



3 昭和34年1月、三井鉱山は第1次合理化につづいて同年の8月、1,300人の首切りを中心とする第2次合理化案を提案。機を同じくして石炭協会は炭鉱労働者11万人の首切り合理化計画を発表した。



4 そして12月、会社は「三池の人員整理はとくに賃金問題」とあるとして、職場活動家300人を含む1,397人に対し指名解雇状を送りつけてきた。年が明けて正月早々、3万人の抗議デモが鉱業所本館から会社の作戦本部である山の上クラブへと押し寄せ、空から解雇状は返上された。



5 この大がかりな合理化は、人員削減による労働強化と労働条件の著しい低下をもたらすもので、三池炭鉱労働者にとって到底認められるものではなかった。